11　日本における『法華経』の受容とその歴史的展開　〈全4回〉

蓑輪顕量（みのわけんりょう）
東京大学大学院教授

受講料	会員	5,200円)
	一般	10,400円)

[日程・時間] 1/16　13：30〜15：00・15：20〜16：50
1/17　10：30〜12：00・13：30〜15：00
[テキスト] レジュメ配布

『法華経』は古代から重要な経典として受容されたが、その変遷を講義する。『法華経』は6世紀の後半に日本にもたらされた。飛鳥時代に最初は講説が注目され、その代表が聖徳太子の講説である。そこではどんな小さな行いも悟りに繋がるという「万善同帰」が主張された。平安時代になると、『法華経』は、『金光明最勝王経』や『仁王般若経』とともに、護国の経典として受容された。また法華八講も創始され、一般に知られる経典となった。

院政期以降は、三講と呼ばれる格式の高い法会が成立したが、そこにおいても、『法華経』は講説され、人々に受容され続けていった。また、経典の講説とともに、仏教教理に関する問答が行われたが、それは論義と呼ばれた。この論義の営みも、興味深いものである。

一方、『法華経』を、読み持つものが現れたことにも注意しなければならない。彼らは持経者と呼ばれ、経典を暗誦して不思議な力を発揮した。このような受容は、『法華験記』に顕著に見られる。この流れは、古代、仏教者に、学問の道と行の道との二つがあることが示されていたが、後者の伝等の上に成り立つものである。

中世鎌倉時代になると『法華経』こそが、釈尊の真実の教えであると主張するものが現れた。これが日蓮である。日蓮が登場する一三世紀は浄土、禅がすでに紹介されており、何が真実の教えなのか、がテーマとなっていた。日蓮によって『法華経』はより所とすべき唯一の経典として選択され、多くの人々の信仰の根拠となった。

近世、近代にも『法華経』は日本人に受け入れた。新宗教の拠り所として、『法華経』の教えが人々に影響を与えたのである。

この講義では、法華経の何が人々を魅了したのか、またどのような受容の歴史があったのかを概観する。